

情報教育におけるタイポグラフィ

On typography in informational education

千葉商科大学 政策情報学部 箕原辰夫

minohara@cuc.ac.jp

はじめに

情報教育あるいは情報リテラシーと題されて文書の作成の基本を教える教育が、大学では1990年代より、小中高でも2000年以降本格的に行なわれてきた。しかしながら、文書の作成に関して、その表象であるところの字体やレイアウトについては、まったくと言ってよいほどの、無知あるいは旧態依然とした教育がなされているのではないだろうか。それらは、出版社の編集担当の専門技術として棚上げされており、普通の人は教わる必要がないという信仰にも近い誤解が広く一般に流布している。既に、ワードプロセッサが出版レベルと同様な高度な印刷ができるにも拘らずである。逆に、出版社の側でもレイアウトはデザイナーに任せており、ほとんどタッチしていない場合があるという状況がある。

複雑だが読みやすい日本語をうまく表出していくためには、いわゆる作文と呼ばれる文や文章の構成技術と同じく、文字に関する知識やレイアウトについても系統だって教えていくべきと考える。このリテラシーの教育は、文字を書き出したときからも始まるし、ワードプロセッサを使い出したときからも始まる。

このような教育の目的としては考えるべきは、それは誰のための表現かということではないだろうか。当然のことながら、その表現を受け取る、即ち、それを読む人のための配慮が、表現技法の中心として深く根づいている必要がある。この論文では、読み手に配慮した文字による表現についてのいくつかのトピックについて考えを述べていきたい。

書字について教育の必要性

大学生に字を書かせてみると、かなりの割合で堪え難いほど字が崩れている学生を発見する。比率も何も考慮されておらず、小学生でもこのような字は書かないだろうという字を書いてくる。しかし

ながら、就職の際には、人事担当者はその人物を判断するのが楽になるであろう。たとえば、字を殴り書きのように粗く書いてくる人物に、細かな作業は絶対任せられない。どこかで仕事の対象となるものを乱暴に扱うだろうという印象を受ける。また、明らかにバランスを欠く字を書いてくる人物は、どこかが偏っており、採用を控えるべきと考えられる。いくつかの文字を書かせただけで、外に虚飾されているその人物の内面の素顔が出てくる可能性がある。

字の汚さに関する鈍感さは、即ち、その人物が自分の記したものを他の人に読んでもらう為の配慮に欠けていることを示す。そのため、文字教育は第一に書字に始まると考えられる。「書字」は「書道」ではない。普段手書きで書いていく字を快適に読んでもらえるように直す訓練過程である。

欧米の教育では、筆記体も教えていないし、ブロック体と呼ばれる字体もまともに書けないで大学を卒業するとのことを聞いた。就職のときに、まともな字が書けないので、それを矯正するようなセミナーも存在しているらしい。それは、欧文はタイプライターに始まるワードプロセッサの普及に伴ってのことに起因するものであるが、教育としての「他者に読んでもらう文字表現」の意識の欠落と考えられる。この欠落は、手書きの文字を書くときだけでなく、ワードプロセッサで表現する文書の体裁を整えるときにも、深く影響しているのではないだろうか。

なお、「書字」の教育の内容として、第一に書き順を教えるなどを思い出す古い世代の人が多いが、それは本末転倒である。目的は、表現された結果である文字および文字列が、他者にバランスよくリズムがよく読めれば良いのである。その表現を得る為には、楷書として、ある書き順が適しているという場合には、その書き順を教えればよい。旧文部省が施した書字教育は硬直化しており、金科玉条の如くに、この書き順を守らなければならないとか、この字は当用漢字の規準に添って、この

部分が出てはならないとか決めており、それをロボットのような小学校の国語教師が、何も考えずに守っている。楷書の歴史を辿り、字形の揺れや書き順について研究し、個々の字について考慮する、あるいは一人一人の字について尊重しながら論していくといった姿勢がないのではないか。例として一つ挙げると、絵や絹などで使われる意系偏は活字体の字形であり、楷書体ではこのようには書かない。

大学では「文字表現」と題された新しい試みの講義を展開している。その中で、最初に行なっているのは「書字」であり、この部分で、あまりにも酷い字を書く—それは大学に来るまでそのような面に関して十分な教育を受けてこなかったという悲惨な事実を意味する—学生の字を個別に矯正していくことを試みている。講義の中では、字を書くときに抵抗の少ない水性ボールペンを利用することなども推奨している。

タイプフェースの選択

専門的にはタイプフェースというのは、一連の字形の統一的デザインであり、個々の表象の結果がフォントということになっている。しかし、ここでは「タイプフェース=フォント」と考えても構わない。日本語には標準的には、明朝体・ゴシック体がフォントとして用意されているが、教員はそれ以上の知識はないのではないか。

Microsoft社の罪の一つは、日本語の表現に必要な十分なフォントをOSの標準として用意していない点にある。最低限のMS明朝、MSゴシックおよび、そのPostScript版さえ用意すれば良いという誤った方針でフォントが用意されている。もちろん、Officeをインストールすれば、いくばくかの安手の日本語フォントが用意されるが。

フォントを選択する上での大前提として、次のような基本の条件がある。

- ・ 見出しは、本文と区別できる十分な厚み（ウェイト:Weight）を持ったフォントを選ぶこと
- ・ 本文は、長く読んでいても疲れにくいフォントを選ぶこと

このような前提に立てば、Windowsに標準で実装されているフォントは、この最初の条件を満たさないことがわかる。見出しをMSゴシックにして、本

文をMS明朝にしても、その対比はあまり顕著ではない。それは、この2つのフォントが大体同じようなウェイトで設計されているからである。即ち、見出しと本文を対比することさえできない。もちろん、ゴシックのフォントをボールド（Bold）体にして、僅かながら厚みを増すことはできるが、一見してわかる対比を顕著に表現できるほどのものではない。

このようなフォント事情から、WindowsではOfficeについている安価なフォントを利用している場合が多い。その中には、ウェイトの大きい字体として「勘亭流」や「POP体」を利用しているものも目に付く。勘亭流は、歌舞伎や相撲で用いられてきた伝統はあるものの、読みにくさから一般書類の見出しに使うことはできないだろう。POP体は、ウェイトのある親近感のあるフォントとしては良いものの、手書きの「安売りちらしで使われる」スク립ト体であるという基本知識をどの程度の教員が伝えているのであろうか。

創英角ポップ体 本日にんじん 90円

POP体を見出しに使ったり、PowerPointのスライドで見ると、—もちろん、そのような基礎知識を持っていながら敢えて使用するのであれば別なのであるが—文字表現の教育の浅はかさを思い知らされる。

Mac OS Xでは、ゴシックや明朝に関して、ヒラギノという異体字などの字形も揃った高級なフォントが標準装備されている。加えて以下に示すように異なるウェイトのファミリーを伴って装備されている。このフォントのライセンス料は高かったのではないかと思われるが、Apple社のこの分野に対する造詣の深さを思い知らされるようである。同社はこのような点からもフォントを通じて日本の印刷文化に貢献しているのではないだろうか。以下はMac OS X標準装備のヒラギノ系フォントのファミリーである。Wに続く数字はウェイトを指す：

ヒラギノ明朝Pro W6
ヒラギノ明朝Pro W3
ヒラギノ角ゴシックStd W8
ヒラギノ角ゴシックPro W6
ヒラギノ角ゴシックPro W3
ヒラギノ丸ゴシックPro W4

スタイルについて

文字のウェイトの対比で見出しと本文を区別をするのと同様に、ボールド体、イタリック体なども文章の一部を強調する為に用いられる。アンダーライン（下線）も強調のために用いられてきた。しかし、下線による強調は文字の字体やスタイルが変えられないタイプライターの時代の苦肉の策であり、あまり使うことは推奨されていない。たとえば、個人的に受け取る手紙の中に下線が引いてあった場合、どのような印象を受けるか考えればすぐ分かる。下線による強調は、非常に堅い強制的な印象を受ける。この頃はNHKのドキュメンタリー番組でも、文書の中の該当部分にスポットライトを当てるようにしている。

強調は英文においては、正式にはイタリック体を使う。しかし、イタリック体であると、強調されているのかどうか視認性に乏しい。もともと、イタリック体は1行に多くの文字を詰め込む為に開発された経緯がある。そのため、多用すると読みにくくなる。逆に、ボールド体による強調は基本的にはウェイトの差による強調・対比と同じものである。きちんとデザインされた英字フォントでは、以下のようにイタリック体やボールド体を別のフォントとして設計している。

Adobe Garamond Regular
Adobe Garamond Italic
Adobe Garamond Bold

日本語のイタリック体は、別のフォントではなく、ただ単に斜めにしただけのものである。これは、正式にはスランテッド体（Slanted）に分類される。このようなイタリック体を文章の中で使用すると前後の文字と被さってしまい読みにくくなる。そのため、日本語や漢字の場合は、イタリック体は見出しなどに使用するに留め、文章中の強調は視認性の面から考えても、ボールド体を使うのが良いかと思われる。

当然強調は数少ない場所が強調されることによって視認性を高めることができる。強調される文字が紙面に占める比率はかなり抑えられなければならない。至る処を強調したのでは、強調したことにならない。余白・対比の原理を文字表現の教育ではすべての学生に、きちんと教えていくべきである。

文字のサイズについても言及しておかなければならない。後で述べる行間とも関連するのだが、サイズが小さいと眼が悪い人達には読みづらい。小さ過ぎると誰にも読めなくなり、一体受け手として誰を対象としているのかを考えさせられてしまう。今後、高齢者の人口の比率が上がっていくことを考えれば、不当に小さいサイズの文字を使うことは避け、誰もが快適に読むことができるサイズを表現側は提供すべきである。

1文字の字下げについて

「段落が始まる時は1文字下げる」という規則は小学校から金科玉条の如きに教えられている。しかし、これは絶対的な規則ではなく、場合に応じては代用の表現を取ることもできる。この論文を改めて眺めて欲しい。段落が始まる際に1文字を下けている箇所はない。しかしながら、段落の切れ目は一目瞭然である。

段落が始まる時に1文字下げる代わりに空行を挟むことでも対処できる。逆に、空行を挟んで段落の区切りを明瞭にした場合は、更に付け加えて1文字下げるのは冗長に捉えられてしまう。実は、段落が始まる時に1文字下げるのは、空行が入れられない場合に限られるのだ。これは英字でも同じ規則で、最初のパラグラフは字下げしない。次のパラグラフを始めるときに空行が挟む余裕がないときには、字下げをするという仕組みである。

1文字の字下げは、逆に弊害が多いのではないだろうか。まず、空行を挟まないのは、それだけで余白がなく詰まっただけで見苦しい。加えて、1文字の字下げを行なうと、左の揃え（Alignment）を見えなくしてしまう。プログラミングでもアウトライン・プロセッサでも、左の揃えは右の揃えよりも重要で、そこに書かれている内容の意味的な位置を表わしている。たとえば、この論文でも図的に用いている表記は右に下げている。一般的に引用でも同じことが行なわれる。

段落の始めを示す1文字の字下げと、意味的な右に下げているのが混用されてしまうと、その段落がどのような意味付けで配置されているのかわかりにくい。特に横書きの2段組では、それが顕著になる。逆に、1文字の字下げは縦書きではそれほど気にはならない。もちろん、意味的な字下げを行なう部分があるが、多くの縦書きの文書で

は、引用などの場合、かならず空行を入れるようにレイアウトされているからである。そもそも、縦書きの1文字の字下げは、紙面が限られている作文用紙において、段落の区切りを編集者に明瞭に伝える為のものであり、本質的なものではない。

揃えは論理的な繋がりを示す為の重要なレイアウトの配置方法である。作文用紙や縦書きでは、上下の揃えがあっていないのは、気には掛かるが、それほど重要ではない。しかし、横書きだと不必要な段落先頭の字下げは、意味的なレベルを表現する左の揃えの線が見えるのを阻害する。特に、一般の大学の教科書となるような本で、数学などの項目を説明するようなものでは、その見苦しさは顕著である。そのような本の紙面においては、2行ぐらいずつで段落の始めの字下げが行なわれており、左がまったく揃っていないように見える。

出版されている本の中にも、特に大学で使われる教科書にWordやL^AT_EXで直接版下までもっていったような出版物がある。これらのシステムでの標準設定では段落の先頭や見出しで1文字の字下げを行なうようになっている。これらの設定のままにしておくと、やはり左側の不揃いが目に付いてしまう。もちろん以下のL^AT_EXでの設定のように、これを解消する設定はできるのだが、多くの出版物において標準設定をそのまま使っているの、左の揃えの線が見えなくなっている。

```
\setlength{\parindent}{0.0pt}
\setlength{\parskip}{0.0pt}
```

行間の調整

段落間の間隔を空けることによって、段落の区切りを表わす場合には、通常の間隔と段落の前後においての間隔との対比を大きくする必要がある。中途半端な段落間の間隔は、行間が広いのか、段落間の間隔なのかわからず、視認性が悪い。上記のL^AT_EXの記述では、中途半端に広い段落間の間隔をなくし、完全な1行の空行を入れることによって、段落間の間隔を大きくするものである。段落間の間隔を抑える為に、逆に、行間を詰め過ぎてしまうと、全体としての視認性は下がるし、上付き文字や下付き文字が来たときに、行間がそこだけ広くなってしまい見苦しい。行間は基本的には広い方が読みやすく、段落間は更に行間と対比できるほど広くなければならない。

行間と段落間の間隔については、多くのワードプロセッサで細かく設定できる。しかし、ほとんどの情報リテラシーの教育では、行間についてどのようにしなければならないかとか、段落間の対比の為にどの程度空けるのかについてまったく説明がされていない状態にある。文書の体裁について英文ではChicago Manualのような教科書があるが、和文についても考えていく必要があるだろう。

行間に関して更に一つ苦言を呈したい。縦書きの多くの書物で見出しが字下げされている。十分な行間が確保されており、見出しと本文の間に一見でわかるほど空間が取られていれば、見出しであることが視認できる。しかし、この見出しと本文との間の行間が狭いことが多く、かなりの縦書きの書物において、特に文庫などにおいて、見出しがどこにあるのか見つけることが難しい。

ワードプロセッサによる文書作成教育

振り返って、文章作成から印刷までの包括的な過程をどの教科で教育しているかを考えてみると、まず、文字の書き方は小学校の国語の授業の中で、文章の作成は、小中高と国語の教科で行なわれている。そして、ワードプロセッサの使い方は中学からの情報（技術家庭）の教科の中で行なわれている。文章作成に関しての総合的な教科を起ち上げることは理想であるが、そうでなければ、教科間の緊密な連携を考える必要はないか。

そのときに、去年の論文にも記したように、アウトラインを利用した文章構成方法を考えるべきだろう。ワードプロセッサよりも、OmniOutlinerなどのアウトライン・プロセッサを利用の方が望ましい。特にWordなど、表枠などがあると非常に動作が遅くなってしまい、快適な思考を文に投影する作業を阻害してしまう。

参考文献

- 硬筆毛筆書写検定・理論問題のすべて、江守賢治、日本習字普及協会、1995。
- 図解雑学文字コード、加藤弘一、ナツメ社、2002。
- 欧文書体—その背景と使い方、小林章、美術出版社、2005。
- The Chicago Manual of Style, University of Chicago Press, 15th ed. 2003.